

岩屋軍記を読む前に

筑紫中心「戦国時代年表」

1433年（永享5年）

少式満貞を打ち破り

大内持直筑前国平定を幕府に注進、その後、大友家とのせめぎ合い少式とのせめぎ合いとなるがこれからは、大方、大内氏の支配下となるようである。

1535年（天文4年）

大内氏と大友氏が和睦

1552年（天文21年）

大友宗麟、高橋紹運を宝満城主とする。

1555年（弘治年中）

川中島の合戦

1560年:織田信長今川義元の桶狭間の戦

1573年（天正年中）

信長、安土城に移る。

天正1年7月18日室町幕府滅亡

1678年（天正6年12月1日）

立花道雪・高橋紹運、立花・宝満・岩屋に籠城する。

このころ、大友氏、日向耳川で島津義久に大敗

このころ、龍造寺隆、信肥前国を統一

1578年（天正6年秋）

秋月種実勢4千人と間注所治部少輔一千人が天山の柴田川で戦う。

1579年（天正7年4月18日）

秋月種実と高橋紹運が二日市で戦う。

1582年（天正10年6月2日）

本能寺の変、織田信長倒る。

1583年（天正11年3月7日）

筑紫方の茶売り、岩屋城内にたまご火を仕掛け、帆足弾正の武蔵城に逃げ込む。岩屋城内の家は残らず焼け落ち、筑紫衆は観世音寺辺まで寄せるが、宝満衆が駆けつけたので引き取る。

1586年（天正14年7月27日）

島津勢の攻勢により岩屋城が落城、小寺官兵衛（黒田如水）の家臣久野四兵衛、筑紫（廣門）・原田（信種）らに降伏を勧める。

1587年（天正15年4月4日）

秋月種実、茶器檜柴をささげて秀吉に降伏する。これより、秋月・筑紫・原田らは、立花統虎に手を焼く。立花は薩摩攻めの先手を勤める。

二日市市場が、秀吉により天満宮領から開放され、楽市となる

天正15年6月

秀吉、島津を降して博多入り

岩屋軍記

筑前叢書目録編集者江藤正澄（1836～1911）

百六巻目の岩屋軍記である。

古文書ですから、九州大学名誉教授丸山雍成先生に振り仮名をうってもらって、井上元生が書き起こしたものです。

本文中の（ ）、【 】は次のとおり

- ・（ ）は書起者の注釈
- ・【 】は原作者の誤記・誤写を書起者が訂正

高橋紹運（たかはしじょううん）筑前を守る大友氏の柱石

？-1586 戦国時代末期の武将。高橋家9代家督。父は 大友庶家 大友家 加判衆(かばんしゅう) 吉弘 鑑理(あきただ)。母は不詳。通称孫七郎、初名 鎮理(しげただ)、のち 鎮教(しげのり)と改名。主膳兵衛尉。『大友家文書録』は主膳正。剃髪(ていはつ)して紹運と号す。

永禄 12 年(1569)豊前 小倉(こくら)城 に移封を命じられた 高橋 鑑種(あきたね) の跡をうけて、岩屋 宝満(ほうまん)両城の城主となる。「大友吉弘氏系図」では翌元亀元年(1570)のことという。天正 14 年(1586)島津氏に攻められ戦死。没年齢から天文 17 年生まれか。

〈高橋家を継承〉

吉弘氏は大友庶家 田原氏 の分流であるが、南北朝末期には將軍家 小番(こばん)衆の一人として重要な地位を占めていた。紹運の父鑑理は、大友家加判衆の一人で、戸次 鑑連(べっきあきつら) 臼杵 鑑速(あきはや)と共に三老に数えられ、立花 鑑載(あきのり(とし)) 誅伐後の 立花城城督となるが元亀 2 年(1571)病没。紹運は鑑理の次男。妻は 斎藤 鎮実(しげざね) の妹。子に 高橋 統増(むねます) と立花家を継いだ 立花 統虎(むねとら) がいる。



ここ のちようせい いん ぎょう てんしょうねんちゅう ころ ちくぜんくに たかはしそうせん いうさむらいあり どうこく
爰に後陽成院の御宇、天正年中の頃、筑前国に高橋宗仙と云侍有。同国

ほうまん しろ このところひがし あつ こめやまみなみ たつがじょう にし いわやじょう
寶満の城に在城す。此所乃東に当て、米山南に龍城、西に岩野城【岩屋城】、

このさんかしょ ほうまんとりでのしろなり しかる そうせんそくじょ あり だい つぐ だんし これ
此三ヶ所は宝満とり出乃城也。然に、宗仙息女のみ有て、代を継ぐべき男子なし。是

よつ ぶんごおおとも かしん よしひろ ただしら ものようしに
に依て豊後大友の家臣、吉弘加兵衛と言う物【者】の次男、吉弘忠四良という者養子ニし

たかはしのいえ つぐ のちほうみょうじょううん いう
て、高橋之家を継ぐ。後法名紹運と云。

さつま ん たいぐん もよお ろくまんよき ひゅうがのくに はつご
其後、豊後の尾形、薩摩をせめむとて、大軍を催し六万余騎にて日向国に發後【向】

はしづみぎ え もんたゆう いうものなり よしひろかひょうえ じょう
す。先陣の大將に吉弘加兵衛、橋津右(衛)門太夫と云う者也。吉弘加兵衛というは、紹

うん ため あになり
運が為には兄也。

やり あわせ いしがきはら うちじに
又、豊後国にて井上道伯と鑓を合、石垣原【大分県別府市に古戦場史跡あり】にて討死

よしひろ ため ちちなり さて ぶんごぜい
にしたる吉弘が為には父也。扱、豊後勢、日向の室津道にて薩摩勢と合戦す。薩摩方の

しまづなかつかさどううまがしらほんごうくらんど を そのぜい いちまんよき たかしろがわ なか
侍大將には島津中務同右馬頭本郷蔵人を先として、其勢壺萬余騎、高城川を中に

へだてじん とり りょうじんあい ごとし ごちょう わたりかけ
隔て陣を取、両陣相さる事四、五町(長)、時に豊後方より河を渡懸しを、薩摩の方

くらんど べ う
より本郷蔵人、河の辺をさる事三拾余町也、時に両方相戦ふ即時に蔵人討ち死にして、豊後

はしまづ にんずうあいかか かかり せんう
方利を得たり、其後又、豊後方より河を渡す。今度ハ島津が人数相掛りに掛りて戦ふ。

いくさなかば い ゆんで めぐり てっぽう
軍半なる時、島津右馬頭手勢四、五百騎、藪かけの土手をつたひ、左手に廻り、鉄炮

ひやくちょう てい いちど かけ このてっぽう うちたてられし しょう
百丁(挺)一度にはなし掛たり。此鉄炮に打立てられ志とう(死闘)に見えける所に、

きり かか ぶんごぜい みぎまがしら よこいりかかりたてられ ひと
右馬頭五百余騎ぬきつれて、切て懸りけれ。豊後勢は、右馬頭が横入掛立てられ、一

くずれ このとき さつまぜい そなえ い
ささえもささえず、どっと崩る。此時、薩摩勢、諸手の備へをとひてつきかかりけれ

ことごと つき いけ おいれられ
ば、豊後勢悉く月のわの池に追被入、討たるる物(者)数を志らず(知らず)。吉弘・橋

このかつせん おおともはたもとほどとおく に けん ことにとおしかり この
津もともに討死しけり。此合戦、大友旗本程遠く、二の見も殊に遠かりければ、斯

せんじんうた これ やすし たかはしそうせんしそくじょううん このたびおおともけ しゅう
先陣討るるとなり、是に依て、高橋宗仙子息紹運に曰く今度大友家、目【日】 劔

ぐん げんご たえ
の軍、言語に絶たり。

はたもとに けん たいしょうたはらしょうにんつみとがかるき しかる このたび ばたらきこう
旗本二の見の大將田原紹任罪科輕にあらす。然に今度の働き功

ほうび さゆう ろくえん じ しょうにん まさむね かたなたまわりそうろこと これ なにごと
褒美として左右に六緑の字あり紹任に正宗の刀給わり候事、是はそも何事ぞや、

ぐしょう たのみ なに
かかる愚將を頼て何かはせん、

いぎ、大友を敵にして我が家の旗をあげむとて、しきりに言ければ、紹運父を勇て【戒

）いわく ごもつとも そうろうえども われわれ ため さんだいそうおん しゅくん ぎ そうろうえ
て】曰、御尤にて候得共、我々が為には三代相恩の主君の儀にて候得ば、

さし うらたてまつる ただひしゅう いっせんず いうばかり このじょううん み
指て恨奉る事もなく、只日州の一戦図におくれたると言計にて此紹運が身、と

ぎゃくしん くちおし し しょく とどま もうされ そうせんきょう
うて逆心は口惜かるべし、ただ思(し)食、留りあれかしと被申ければ、宗仙卿、

これ しょう それゆえ ふし あいだふわ なり またそうせん じょううん もうすところり かのう
是を請ず、夫故、父子の間不和に成、亦宗仙も、さすが紹運が申處理に叶

ところ ゆえ ぎゃくごころ ほうまん いわや) しろ りょうじょうとも じょう
たる所なれば、故なく逆心もなりがたく寶満も岩野【岩屋】の城も両城共、紹

うん かわらだ かわらたけ しろ かのち じゅう そのごあきづき
運にゆづり、其身は豊前の国香春たけ(香春嶽)を城にして、彼地に住す。其後秣月

う

あきづき たねさね
(秋月)種真【種實】の次男九郎といふを養子にして、宗仙の家をゆづる。後には、高橋

さてまた いわの じょううん ふたりのだんしあり あに むねとら おとうと そうます
右近と言。扱又、岩野【岩屋】の紹運に二人乃男子有。兄を宗虎【統虎】、弟を宗増

う ちゃくなんそうとら たちばなみちゆきようしむこ たちばな いえ つが たちばな
【統増】といふ。嫡男宗虎【統増】を立花道雪養子掣にして立花の家を継す。立花

さきんしょうげん いい いちせき ず そのゆらい たずぬ
左近將監と言しは、此人なり。此左近を【に】道雪一跡をゆつる。其由来【由来】を尋

そのころ きゅうしゅうなかばさつま したがいしかれ たかはし たちばなりょうけ こうおん
るに、其頃は九 笏過半薩摩に随い然ども高橋と立花両家は豊後大友家の厚恩

たくらみ じょううんどうせつつねに なじ いおおとも だい まもりたまい
を忘れず、逆心の企もなく、紹運道雪常にしたしく馴む。つひ大友の代を守り給、

まこと たぐい めいしょうなり ことあり さこんしょうげん とき いわや たちばな
誠にたくひなき名將也。有事、左近將監いまだなきの時、岩野【岩屋】より立花

き あそぶことあり このとき とがびとあり これ う みちゆきおもうしさいあり
に來たり遊事有。此時、道雪の所に科人有り。是を討たせらる。道雪思ふ仔細有て、

きりて さむらい もうしあわせ さこん め まえ これ きら る どうせつきこん むね て
切手の侍に申合、左近が目の前にて、是を切せらるる時に、道雪左近が胸に手を

おき うかがいみられ かおいろ いろ
置、伺見られけるに、いかにもしづかにして、常のごとし、顔色におびえたる色なし。

ようこのひと いっぽう たいしょうきょうなるべ もの おもい たまい つい いっせき づ
いか様此人は、一方の大 将 共 成へき者よと思ひこめ給ひて、終に一 跡をゆつる

たまう きこえ そうます あり じょううん いっせき つが あきづき
給ふと聞へけり。此左近弟に、宗増【統増】 て有りけるを、紹 運の一跡を継せ、秋月

たねさね えん むすび すえなづけ はかり こんれいぎしき ぎしき
種真【種實】と縁を結び、末名付たる 計にて婚礼規式(儀式?)はなし。

どうこくのかつお じょうしゆ ちくしひろかど このこと つたえきき いっか りょう
かかる所に同国之勝尾の城 主(現在鳥栖市)、筑紫廣門、此事を伝聞、一家の良

しん あつめていう いままで あきづき たかはし きんりんざいじょう
臣を集めて言、今迄は秋月、高橋、筑紫、立花、何も位をたくましくして、近隣在城

ところ いまたかはし あきづき えん むすびわぼく しからばかれ くみ われら
する處に、今高橋と秋月と縁を結び和睦せば立花も一家になり、然は彼に組し、我等

ばかりべっけ てき かのさんけものども あわば つい
計別家の敵となり、彼三家者共とせめ合は、終には我家めつぼう【滅亡】うたがいな

ひょうじょう
し。いかがせんと評定す。

ちくしのかしん なにがし しあん もうし まこと あきづき たかはしいあい
時に筑紫之家臣に何某しばらく思案して申しけるは、誠に秋月、高橋言合、立花と

いちみ し おだいじ とうけこれ う
一身【味】にて、三家の敵となつては、ゆゆ敷き(ゆゆしき)御大事、當家之めつぼう遠か

じ しょせん きみ おひめきみさま われら くだされ おともつかまつり いわや
るまし、所詮君の御姫君様を我等に被下まじや。しからば、我等姫君の御供仕、岩野

へまいり じょううんこう おひめぎみ たまえ もしこのこときだい ちんじ
【岩屋】江参、紹運公の御姫君になし給へ、若此事稀代の珍事(ちんじ)なれば、

ごひきうけたまわりござなくそうらわば 、ぎみ とも しょうがい およぶべ もうしあげそうろう それ
御承引御座無候は、姫君と共に生害に及ぶ遍(べ)しと申上候べし、夫

ごひきうけたまわりござなくそうろう ひめぎみ さし そのかたな じがい じがい つかまる
にて御承引御座無候はば、姫君を指【刺】ころし其刀にて志かい(自害)可

べくそうろう まんいちごしょういん い かのうところなり
仕候、万一御承引おいゐては、當家の御運、天に叶處也。

このぎどうどうじたまえ もうし ひろかど はじめ みなみなこのぎ おなじ やがてひめ いわや しろ
此儀に同じ給へかすと申しければ、広門を始、皆々此儀に同じ。頓而姫を岩野の城

つかわ くだん ともたてまつり
に遣しける。件の家臣是を供奉し、岩野の城へ行向かい、しかじかのヨシ(由)を

ぜんだいみもん ちんじ みな ありさまなり じょううん こと
申上る。誠に前代未聞の珍事なれば、皆あきれたる有様也。紹運もけしからぬ事に

おもわれ はやばや ださぎ ことさらあきづき ひめ やくそく
思われけれ。はや々ことばも出さりけり。殊更秋月の姫に約速【束】あれば、思いもよ

しだいなり いそぎひめ かえる おおせ ば つくし かしんこれ きき つつしんで
らぬ次第也。急姫を供して勝尾に帰べし、と仰ければ、筑紫が家臣是を聞、謹而

いい まこと じょううん おおせ もっともり かのうそうろうところなり われがのぞむところ ぜんだい
言けるは、誠に紹運公の仰、尤理に叶候處也。我が望處、前代の

ちんこと 瑠事(ちんじ)なれば、^{とにかく}角、^{うけさせたまう}受けさせ給うましき事は、^{かねて}兼而より^{おもうけしこと}思うけし事にて^{ごぎこう}御座候、

しかれども 然共、^{あきづきどの}秋月殿と^{ごがったい}貴家と^{たまわば}御合躰有りては、^{れき}れき主の^{筑紫を敵にし}筑紫を敵にし給は、^{広門めっぽう}広門めっぽう

うたがいなし。さあ^{われそのじせんじょう}らば、^{うちじにつかまつるべきいのち}我其時戦場に討死可^{ため}仕命を^{ただいま}今主君の為にすて、^{只今}只今

ひめ 姫をさし殺し^{ころしじ}志かい(自害)を^{じがい}遂げ、^{とげ}主君の恩に^{しゅくくん}ほうするへし^{おん}【報ずるべし】。此上は^{このうえ}御

えん 縁のましを^{たてまつ}けがし^{おもいつきり}奉るべしと^{ふぜい}思切たる^{りょうがん}風情にて^ち両眼に^{あたり}血をそそぎ、^{当利をにらみ}当利をにらみ

たるは、^{まことにきしん}実鬼神とや^{もうす}申べし。紹運、^{見たまい}此者のあり様を^{まことちゆうぎ}み給ひ、^{誠忠儀の深き事をか}誠忠儀の深き事をか

んじ、^{また}又は^{ゆえ}故なく^{ふびん}姫を^{こと}ころさすも^{かのもの}罪深く^{もうすむね}不便なる^{まかせてよぎなし}事に^し思い、^{彼者の}彼者の^{申旨に}申旨に^{任せて}任せて^{餘儀無}餘儀無。

ひめ 姫をぞ^{とどめ}留られける。夫より^{それ}筑紫と^{なる}高橋と^{このことやが}一家に^{きこえ}成。此事^{たねざね}頓て^{秋月に}秋月に^{聞へければ}聞へければ、^{種實}種實

おおい 大に^{このうえ}立腹し、^{かのりょうけ}にくき者の^{あんのん}ふるまいかな、^{むねん}此上は^彼彼^{両家の}両家の^{者共を}者共を^{安穩に}安穩に^{置いては}置いては^{無念の}無念の

ことなり 事也と、^ば深く^{やが}うっぷんに^{こい}思われけれハ、^{いわや}頓て^{しろ}薩州へ^{せめおと}加勢を^{もうすべき}乞、^{岩野の城を}岩野の城を^{責落し}責落し。可^申申

とて、^{いそぎ}急^{もうしいれる}薩摩へ^{かくし}申入。此事^{じょううん}隠なければ、^{こんど}紹運も^{いくさ}今度の^{よせて}軍、^{味方は}味方は^{小勢}小勢、^{寄手は}寄手は

大勢のが^仔れぬ所也。われ^{おき}思う^{こも}子細(しさい)あれば、^{寶満の城へ}寶満の城へは^{妻子を}妻子を^置置、^{其身は}其身は^{岩野へ}岩野へ^籠籠

られける。^{そもそも}抑^{おおたけおい}岩野の城と^{みねだかう}申すは、^{前は}前は^{谷深く}谷深く^{岩を}岩を^{そびえ}そびえ、^{大竹生}大竹生^{しげり}しげり、^{峯高}峯高^{ふして}ふして

道ほ^{びょうぶ}そく、^{山けわ}山けわ^{しうして}しうして、^{屏風を立て}屏風を立て^{たるごとく}たるごとく也。後ろには^{いわたつ}四王子の^{やまにつづく}やまにつづく^{岩松}岩松、^{道を}道を^{わかたず}わかたず、^{鳥けだもの}鳥けだもの^{ならで}ならで^{かよう物}かよう物【通う者】なし。

水は^{うけ}東より^{おおひでり}谷を^{このみずたゆ}せき上げ、^{たとえ}城の^{頂上}頂上に^{是を受}是を受、^{いかなる}いかなる^{大日照り}大日照りに^もも^{此水}此水^{絶る事}絶る事なし。譬

は^{よせて}寄手^{おおぜいなりとも}大勢也^{たやすく}共、^{おちざ}輒^べ落さる^{よう}へき^{さて}様なし。扱^{さだめ}紹運は、^{役所}役所^{の手分け}の手分けを^定定^先先、^鳳鳳【風】

呂の^{かため}谷、^{大手之口}大手之口には、^{矢山中務}矢山中務を^{大将として}大将として、^{式百余騎}式百余騎にて^堅堅^{たり}たり。西の^{大手}大手には、^北北

原^{せつつ}撰津を^{はぎはら}大将にして^{あわれむべき}百七拾騎似【に】て^堅堅^{たり}たり。東^{水之手}水之手には、^{萩原}萩原^憐憐^可可^{八十騎}八十騎にて^是是

を^{かた}堅^むむ。扱^{さて}、^{くつきょう}紹運は、^{したがえ}究竟の^{兵百余騎}兵百余騎^{前後左右}前後左右に^随随^{甲之丸}甲之丸に^{ひかえ}扣^{られ}られ^{其外}其外^{二三之}二三之

丸に^{てっぽう}射手の^{もた}達者に^{いっせい}弓鉄^砲砲を持せ、^壱壱^勢勢^{につつ}につつ【筒】、^{ひかえ}ひかえ^{たり}たり。都合^{軍勢}軍勢^{八百余騎}八百余騎、^一一

命を岩野の土中に埋^{うず}み、名を後代に揚^{あげ}むと思^{おも}切^{いきり}たる士卒の心此^{これ}ゆゆしけれ。扱^{さて}又、宝満
の城には、紹運の北^{じなんしゅぜんそうます}の方次男主膳^{ふだい}宗増^{きたはらちんきゅうあいそえ}に譜代の良臣北原^{きたはら}鎮休^{ちんきゅう}相添^{あいそえ}、其外、家中足弱
き妻子共^{かごめおき}籠^{かご}置^{おき}、ゆうかいを頼^{たのみ}、籠^{かご}られける。

ここに^{ここに}なかつかさ^{なかつかさ}すで^{すで}やなが^{やなが}
斯而薩摩勢島津中^{なかつかさ}務^すを大将として、已に秋月に着陣す。弥永【筑前町弥永】と言所に陣を

取^と、筑後の星^{うかがいところどころ}伺^{はせ}住所^{はせ}の人数馳^{はせ}加^{はせ}り、秋月が勢と諸共、都合其勢一万余騎の着到付^{とん}、頓

に岩野へ押寄、此節立花左近方より、父紹運方へ使^{つかい}文^{ふみ}を以て被^{もう}申^{され}けるは、今度薩摩の勢^{ぜい}

あわせ^{あわせ}はせもよお^{はせもよお}せめん^{せめん}しかるに^{しかるに}
并に隣国の武士馳^{はせ}催^{せめん}し、當家の一類を責^{せめん}むとす。然^{しかるに}に貴家の居城岩野と宝満に御人

数を分^てられ、立花の城を我手勢^{ぜい}計^{ばかり}にて守りては、三方共小勢にして、いつつれの城も敵の

すなわち^{すなわち}おぼえ^{おぼえ}ぎそうらわば^{ぎそうらわば}たとえ^{たとえ}
為に輒^{すなわち}落^{おぼえ}されぬべく寛^{おぼえ}候、同は一所に集り此名城にて、敵をふせき^{ぎそうらわば}候^{たとえ}は、譬へ何

じひ「こそ」ぞんじそうらえ^{じひ「こそ」ぞんじそうらえ}いそぎ^{いそぎ}ひきいれたまうべ^{ひきいれたまうべ}
十万騎寄来る共、左右なく落さるる事あらしと比【社】存^{いそぎ}候^{ひきいれたまうべ}へ、急^{いそぎ}所勢を引入給ふへ

もうされ^{もうされ}いもつとも^{いもつとも}いう^{いう}こもる^{こもる}すなわち^{すなわち}
しと、委細に被^{もうされ}申^{いもつとも}ければ、紹運是を聞給ひ尤^{いもつとも}左近が言如く、両家一所に籠^{こもる}ならば、輒^{すなわち}

じ^じはかりごと^{はかりごと}こそおぼえそうろう^{こそおぼえそうろう}さりながら^{さりながら}
破られましとの謀^じもあらんと社^{はかりごと}寛^{こそおぼえそうろう}候^{さりながら}、乍去今敵大軍にて寄きたると聞、我岩野

かつは^{かつは}はかりごと^{はかりごと}ぎ^ぎそのゆえ^{そのゆえ}
を落、立花の城に籠^{かつは}こと、且ハ我が道よわきに似たり、又は^{はかりごと}謀^ぎの足らざる處也、其故は、

ふしひとところ^{ふしひとところ}いて^{いて}
立花名城也しを頼み、父子一所に集り居、思わすも、城を落されば、高橋・立花の両家、

たちまち^{たちまち}たえ^{たえ}くい^{くい}ぞ^ぞべ^べず^ず
忽に絶なん事くひ(悔)そを廻らすへからず、志よせん(しよせん)我身は岩野の城

きわむべ^{きわむべ}ば^ばせんて^{せんて}ここ^{ここ}よるべ^{よるべ}め^めあまるたいてき^{あまるたいてき}とも^{とも}われ^{われ}
にたて籠、死を極へし。然は岩谷へ先手なれば、爰へ寄へし。目に餘大敵なり共、我

しそつどもし^{しそつどもし}ふせぎたたかう^{ふせぎたたかう}ば^ばはおく^{はおく}べ^べ
士卒共死をかるんじ、防ぎ戦う者ならばやわか十四五日の日数ハ送るへし。我じかい(自

このたちばな^{このたちばな}またたちばな^{またたちばな}ひすう^{ひすう}べ^べかよう(かよう)^{かよう(かよう)}りょうじょう^{りょうじょう}
害)と見て、此立花をも責むべし。又立花にも日数つもるへし、加様【斯様】に両城

おんはっこうは^{おんはっこうは}ほど^{ほど}たいこうおんはっこう^{たいこうおんはっこう}きこえ^{きこえ}さつまぜいとるもの^{さつまぜいとるもの}とり^{とり}
をせむるに秀吉公御発向ハ、程有べからず。太閤御発向と聞へるは、薩摩勢取者も取

えず^{えず}ひきとるべ^{ひきとるべ}しから^{しから}ばわれ^{ばわれ}はむなしくなり^{はむなしくなり}たちばな^{たちばな}うんひらくべ^{うんひらくべ}おや^{おや}こ^こおも^{おも}う^う
あへす引取へし。然ハ我身ハ空敷成とも、立花は運開へし。親の子を思ふ

みちかぎり^{みちかぎり}ば^ばこのむねさこん^{このむねさこん}いさいもうす^{いさいもうす}このしるらくじょう^{このしるらくじょう}こと^{こと}あい^{あい}え^えおも^{おも}う^うべ^べ
道かぎりなければ、此旨左近に委細申べし、此城落城の事、相かまへて思ふへか

ず いまたちばな けんごまもり ひでよしこう おしんぼつ あいまつべ つかい たちばな かえさせられ
らす。今立花を堅固守り、秀吉公の御進發を相待へしとて、使を立花に被帰
る。

さてまた たねざね ぶんご あとづめ そのみ いわや
扱又、あきづき種真【種實】は、豊後の大友の後詰をふせがんとて、其身は岩野へ

しゅつじん とどまり てぜいふたつ あいくわえ
出陣なく、あきづき【秋月】に留て、手勢二に分け、半分は島津に相加へ、半分は
お り
秋月に残し置け里。

ここにしまづなかつかさ あきづき ぜい やなが うちたち だざいふ きじん たかおさん
斯而、島津中務は、秋月の勢を加え、弥永を打立、大宰府に着陣す。高尾山【現

じん え めいきやくでら で みちみち
在大宰府市高尾山】へ陣をかまへ、明客寺の辺まで陣屋を掛、幕を張り廻し、諸軍勢ミち

ねん
て、尺寸のなし、此【頃】は天正八歳七月中旬薩摩の勢壱万余騎、現【観】世音寺より風呂

さしむかう
谷大手口に指向ふ。

あきづき ぐんびょう よこたけ ひがしみず て おしあがり りょうじん せめあがる
秋月の軍兵は、横竹から東水の手を押上り、両陣東西南北より責上ル。昼夜の

もう せきのぼり じょうちゅう へい かねてし ば いちめい
さかいもなく、もみにまふて責上りける。城中の兵も兼而斯したる事なれば、一命を

ここ せんど ふせぎ からめ び しばらく
惜しまず爰を専度と防キける。大手弱【搦】手の諸軍勢、城中共おめき、さけひととき、暫

やむとき ただひやくせん かみなり おおやま くず うみにいり
も止時なし。只百千のいかつち（雷）なりおち、大山も崩れて、海ニ入けん。こ

ち うまむ おぼえ よせておおぜい えども あるはいし うた あるい
ん【魂】もおちて、地に埋かと覚へける。寄手大勢なりといへ共、或ハ石に打れ或は

ゆみてつぼう あたり しせい ず ておい うかず ず
弓鉄炮に当り、死生しらすの手負の物【者】、幾千人といふ数をしらす、さしも深き谷も人

おちかさ に こそうづめ ぐん さん じ あとまで
馬いやかに落重り、死人ニ而社埋けり。されば、軍さん（散）して後迄、谷川の流れ、

むかい もみじ いくみず ふか ず こんき
向になって紅葉のかけを行水のくれない深きにことならず。近キ頃迄は、此合戦に討死

のこり えぎ は みね に
しける軍勢のぼうこん（亡魂）残て人の目にさへきり、風の夜ハ谷峯しんとうニして、わ

ごえ きこえ ざ じ ありさま むらのろうかたりつたえ
めき、さけび聲かすかに聞へ、いと、すさまじき有様と、村老語伝へたり。

ところ いわやへおんつかい こばやししんべえい いうもの かみがた
かかる所に黒田孝隆【高】公より岩野江御使有り。小林新兵衛尉と言者也。上方

いわや き み ぼ とり うんか ごとく たい
から岩屋に来たりて、見れば、敵、城外を取かこみ、雲霞の如く也。北の尾一方、態とあけ

たりとみ^えゑて、敵^{てき}壺^{いちにん}人もなし。是に依^{より}、小^こ林^{ばやし}は四^し王^{おう}子^じ【四王寺】により山に上がり、北
の尾^{ちかづき}崎^きから城^{つがい}中^{よし}に近^{もう}付^{しいれ}、堀^{つがい}裏^{よし}に立^{もう}ち^{しいれ}より孝^{つがい}隆^{よし}【高】から使^{もう}の由^{しいれ}を申^{つがい}入^{よし}たり。

その^{じょううん}時^{かつちゆう}、紹^い運^{おおなぎ}甲^な冑^たをたひし(帯^{まい})し大^つ長^{つしん}刀^でを、つき給^つひて、小^つ林^{しん}に出^で会^い、小^つ林^{しん}謹^で而^い
孝^{つがい}隆^{よし}【高】使^{もう}相^{つがい}述^{よし}へたり。紹^き運^{きた}聞^{まい}給^{まい}ひ、孝^{かん}隆^{えつ}【高】公^{あさ}より是^{かん}迄^{えつ}の御^{かん}使^{えつ}者^{あさ}御^{かん}情^{えつ}の程^{あさ}感^{かん}悦^{えつ}不^{あさ}

から^{から}ず。貴^ひ殿^きを城^{やすみ}中^{もう}へ引^{ぞん}、旅^じの疲^{そう}れ^らを休^え申^え度^も存^み候^{たま}得^う共^ご、唯^み今^{たま}見^う給^ごふこと^ごく敵^み陣^{たま}外^う
をう^もんか(雲^も霞^ろ)のご^かとくか^たこ^たみ^たり。いまにても諸^{せめ}方^のから、か^{せめ}つ^のき^{ぼり}つ^{そう}つ^らて^わて^ば責^せ上^めり候^せハ、

饗^{きやう}応^{おう}も^あり^るけ^べふ(今^こ日^れ)有^かへ^えり。早^か々^え是^かより^え帰^か給^えひ、孝^よ隆^ろ【高】公^まへ^い宜^ま申^いさ^ませ^え給^まえ^と被^ま
申^され^ばは、新^み兵^す衛^えも^かか^かる^が折^は節^{おも}、見^ど捨^つて^かい^{へん}り^じか^つた^かく^つハ、思^つひ^かしか^つとも、使^ついの^{へん}変^じ躰^じ【事】を

達^たせん^ため^め、其^{その}上^う紹^{もう}運^さし^れき^りに^ば被^ち申^{から}け^られ^ばは、力^{じやう}不^{いと}及^まぎ、紹^い運^まへ^ご暇^び乞^び、し^のひ^やか
に元^{その}の道^ごへそ^も帰^ろり^かける。其^あ後^わ、諸^{たい}方^こ之^う寄^ち手^ち調^ちし^あ合^あ鐘^あを^あ鳴^あし、大^{たい}こ(太^う鼓^ち)を^う打^ち、時^ちの

こ^えへ(聲^え)を^え上^えげ、^えゑ^いゝ^えこ^えゑ(聲^こ)にて^こ責^え上^こる。城^て中^つの兵^ぼ共^う、堀^ちた^ちて^ちの^ちさま^ちから^ち弓^ち鉄^ち炮^ちを

打^うち^あし、雨^あめ^あふ^ある^あご^あと^あく^あ、^かけ^はは^かな^こし^こ掛^せたり。或^せハ^せ大^せ木^せ・大^せ石^せを^せ落^せし^せ掛^せ、爰^せを^せ専^せ (専^せ度^せ) と坊^せ記^せ【防^せ
き】^あり^がける。中^こにも^こ萩^だ尾^い大^だ覚^い、矢^あり^が山^こ四^だ郎^いと^あり^が名^こ乗^だて、太^だ刀^いの^だ者^い有^だしか、爰^だにて^だは^だ大^だ覚^い、か^し
こ^かにて^かは^か四^か郎^かと^かて^か掛^か合^かゝ^か責^か戦^かい、究^く竟^きの^く兵^う数^ち百^ち人^ち討^ち取^ちり。

され^ど共^も、死^し生^{せい}し^ずら^ずす^の之^の薩^う摩^つ勢^も、討^ど共^こ射^これ^ずとも^お事^や共^うせ^ずす、親^お討^やれ^ず共^も、子^ど是^こを^こ助^こす、
子^こ打^これ^こ共^こ、父^たし^すら^ず、の^こり^こ越^えゝ上^はり^はければ、城^は中^はの^は兵^は共^は、次^は第^はゝに^は討^は死^はし、或^はハ^は手^は負^は、

或^はは^は気^はつ^はか^はれ、思^はふ^は様^はに^はは^はた^はら^はき^はな^はら^はず。二^は、三^はの^は丸^はを^は責^は被^はり、本^は丸^は計^はに^は成^はに^はけ^はり。
今^こは^こ是^こ迄^こそ、さ^この^こ三^こ人^こ多^こク^ころ^こし、罪^つ作^みりに^せん^せな^せし。い^いさ^いや^い最^い後^いの^い軍^いして、寄^よ手^せの

や^しつ^し原^し【奴^しば^しら】に、目^しを^しさ^しま^しせん^しと^して、紹^し運^し其^し日^しの^し出^し立^しには、赤^し地^しの^しひ^した^しれ^しに^しひ^しを^しと^し
(ひ^のど^のお^のし)之^の鎧^の之^の今^の日^のの^の刻^のと^のかゝ^のや^のく^のを^のす^のき^のま^のも^のな^のく^の拵^のへ、鍬^のか^のた^の打^のる^の甲^のの^の緒^のを

し^め、三^じ尺^に五^に寸^に長^に刀^に脇^にに^にさ^にし^には^にさ^にみ、我^じに^に同^にし^にき^に兵^にを^に廿^に七^に騎^に前^に後^に左^に右^にに^に立^に並^にべ、村^む雲^ら立^も

てひかえたる大勢之中に掛入、東西を拂ひ、南北に追廻し、黒〇を立て切て廻れハ、
寄手大勢也といえどもわつかの小勢に切立てられ、風に木の葉の散如く四方の谷へさつと
ひく
引。

其時、紹運立帰て、大幕打上げさせ、御酒ゑん(宴)有り。大将の鎧に立ちたる所
之矢七筋、ほう先両の手に三ヶ所深手を負給ひて、血之流るる事瀧のごとし。然とも、
立たる矢をもぬき給わず、ながるる血をもぬくい給はず、敷か己【敷皮】の上に立なから、
大盃にて三度請給へば、相随う良臣各拍手を揃えこゑを上げ、名残の酒宴そすすめけ
る。

かかる所に荒川壱岐守よろいに立所の矢指、壱筋枯野に残るすすき風にしなえるごとくに
才かけながら、大将の御前に参申しけるハ、敵ははやさか(早坂)に取上り、水の手を取切、
やがて場内へ乱入候。敵近ぬ【来ぬ】先に御志かい(御自害)可有と申ければ、紹運も今は
是迄と思召、たて之さまを切落し、身をあらわにして念佛十返計となえ給ひ、諸軍
勢に向いて、大音上て被申けるは只今我志かい(自害)するあり様を見て、汝等共か、
武運忽つきて、切腹時手本にせよと言ままに、鎧をぬきて、たてよりしたへなけ落し、
錦のひたたれ、はかまはかりねりぬき(練貫)示、袖押はたぬき白く清けなる。はたへに
刀をつき立、脇より右之脇迄一文字にかき切て、腹わたつかんて、たての板になけ付、大刀
をくわえうつふしにて失給ひける。是を見て、座をつらねたる郎等共、我もと押しはた
ぬき、腹を切人もあり、自身に首をかき落人も有、おもいゝの最後の躰、実ゆゝ敷そ見
えにける。其外の良臣、君思を蒙人々、以上百七十人我れ先にと腹伐て、屋形に火を
掛たれば、ミゆう火さかんにもえ上がり墨煙天をかすめたり。庭上、門前に並居たる老若
男女、是を見て、腹かき切、火の中へとひ入も有。或父子兄弟指ちがゑたをれ(たおれ)

ふすも有。血ハ流て大地に落、まんゝとして、供水【洪水】のごとし。

鹿はね（屍）は、山野に横たへ、累ゝとして山のごとし。死かいはやけて見えね共、
後に名字を尋ぬれば、此城にて討死したる者、雑兵共八百七拾人、惜かな、此大將は
豊後大友の家臣となり、朝恩を忘ず、逆心の心もなし。

仁をしらぬ者は、君恩をすて、薩州にしよく（食）し、勇なき物【者】は、一旦死
をまぬかれむとて、計略に逢、智なき者は時のへんをしらず、道に背くことのみ有しに、
此人は、智仁勇の三徳を兼て、死を善道に守り、上古はしらず、近代は此紹運程の名將は
なかりけるに、天運、時至ぬれば、行年三拾八才、天正十四年七月廿七日の朝の露と消へ
給ふ。

世に痛わしき有様也。掲載前紹運之つもりの日数に一日違ひ、落城しけり。

「前紹運之つもりの日数に一日違ひ」

この文は、秀吉が九 芟 征伐の筑紫到着まで十四、五日持ちこたえ、後一日持ちこたえた
ならば、落城しなかったのではないかということだと思われます。

夫から薩マ勢、宝満の城に責上り、頓而是を責落す、紹運の北ノ方、高橋主膳宗
増を生捕、薩摩へつれ越けるか、後には立花方より取帰【返】し（取り返し）けると也。
筑紫廣門、勝尾の城も此時落城す。大將廣門と薩州の侍大將河上左京と太刀打して、廣門討
れけり。其最後の有様、古き人の語伝しは、廣門と左京と互勝負けっせんと打はけみ
し時、左京一首の歌を詠ス。

「打むすふたちの下頃うふやなれ、たゞ切かゝれ先ハこく樂（極樂）」と申ければ、
廣門も取りあえず

「さらは切、やいはに掛る物はなし、本来、空はかたちなれば」

とよみすて、互に打合けるか、左京が太刀、廣門のももにしたたかに当り、いぬいにたお
れけり。廣門打太刀、左京に強く打付ければ、よろひの上にて通らず、左京 頓 て廣門か首
を打けり。其後、薩摩、秋月の勢、立花の城へ押寄せ、是を責る。城の大將、左近將監、
そのころじゅうはちさいなりしが、ゆうき ひと すぐ ちとくある
其頃十八歳也志か、勇氣、人に勝れ、知徳有大將なれば、城中の兵をいさめて、自身
もろて もちくち ちゅうやしょう ゆだん はせめぐり げち え
諸手の持口を昼夜少も油断なく馳廻り、下知をなし、立花の手勢、名をゑたる兵おおか
りければ、爰かしこのつまりに折合、命を惜ますせめ戦う。され共、敵は大勢なり。
あらて いれかえいれかえせめたたかう きき
荒手【新手】を入替、責戦う。味方は岩野、宝満落城と聞、士卒力を落し、敵は両城
責落し、勝に乗たることなれば、討共、ことともせず、既に二、三ノ丸のり取、つめの
城に也、あやうかりし處に、まきのだんじょう
槇野弾正殿からはやうや来り、立花之城を近国の武士にかこ
まれ、ろうじょうこれありのじょう しんみょう ずいぶんちからはげみ べ
篁城有之条、神妙也。随分力勵をなし、堅固に城をたもつへし。其間
に、ごしんぱつ あり ぎやくと いちいち べ え
秀吉公御進發を有て、秋月・薩摩の逆と（逆徒）等、一々に亡すへし。相かまゑて、
心よハく（よわく）おもうべ ず おんつかいなり
思ふへからず、との御使也。是に城中力を得し、の齒はかみをなし、
はやひきいろ ぞ これ ぞ ぞ もうされ
早引色にそ、是にどうてん（動転）し、はや引色にそ見えにける。大將島津被申けるは、
此城を責落す。又、今五日を すごすべ しけれども はっこう
過へからず、然共、秀吉九弟（九州）発向【出發して目
的地に向かう（軍隊が発向する）】、ちかつかば づ さきしろ
近付ハいたつらに、他国にて軍勢の先城ついやして、
せんなし。先城を やしない べ かえり かみかたぜい
養おくへし。薩摩に帰て、国の用害【要害】かまえへ、上方勢のよ
せ来るを相まつへし。大事の前の小事なれば、いさや帰陣すへしとて、べ そなえそなえ ぎょうれつしらべ
備の行列調
人しつかに城を引たり、城中に籠る老若男女安堵の思ひをなし、魚の水をゑたることし。城
の左近將監、家臣あつめ もうさられ は このたび おとされず
被申けるハ、今度我、薩摩勢に城を落されず、堅固に篁城すとい
え共、てきもふ【無】勢なれば、はかばかしく ひといくさ ず ただしろ おとされざ
有しまて也。今、敵引取折をゑて、城中から、つくだ べ おもう さ
付出し、一戦すへしと思ふなり。左もな

ば むねんなるべ いま てんか ひと わらい くちおし べ かたがた おおせ
くは、無念也へし。今より天下の人に 笑れんこと口惜かるへし。方々いかにと 仰け
る。老臣に美作守小野和泉^{すすみ}す^{もうすよう}ミ出^{ごもつとも}て 申^{そうらえども}様、大将の御^尤には 候得共、今度大て
きに城を落されは 社^{おとさればこそ}諸卒一命を捨てふんこつ【粉骨】を^{ふりよ}尽し、不慮に今死を出^{いまし}一^{でのいっしょう}生^{あい}に逢、
しかるに たいこうひでよしこう きんじつおはっこうあるべ ば あたりけ ごうん たちまち べ
然^しに太閤秀吉公も近日御発向有へし。さあらは、當家の御運、^忽開かるへし。
めでたき まちたまい かさね とげ え
目出度折節、しばらく待給ひて 重^{とげ}て御本意^え遂させ給へ、殊に味方の軍兵とも、数日の合
戦につかれたる小勢を^{もって}以、さしも大軍に追掛け跡をしたう物ならば、味方^ばの人数やハか(や
いかに)、^がのかれ申まし、^じ勝^{かつ}て^{かぶと}甲^おの緒をしめよとハ、^はか^{もうすべ}よ^{ただ}う^びの事おや申へし。只おんひん
こそ おいてこそそうらえ そうらええ もうし
社、君の御為に而 社^候へ、此儀は、我々か申旨に御まかせ 候^へか^しと、皆一同に 申
ければ、大将涙を流し給ひて、方々は口^{たま}惜^{くちおしき}き事を申す物【者】哉、我若年成といえとも
きゅうば うこと かたがた う
弓馬の家に生れて、儀を思ふ^烟（事？）せつ也。方々も思ふて見よ、まさしく父紹運は我
が いわや しゅぜんまで とりこ
等か命を助ん為、岩谷（岩屋）において御自害有。殊に母上弟主膳^迄、敵の取子（虜）
となり、^{るいせつ}泪^く切^{うけたまう}の苦を請給ふを、目の前に見なから、我等か為には二親の敵也を、おめと
ひきとら ぐ うつ
引取せては、無念のたくいなし。今更てき【敵】を付【討つ】すら大軍にさえられ【遮ら
れ】、合戦難儀に^{かつせんなんぎ}及^{およぶ}ならば、其戦場を枕として討死して、父の孝養にほう^ず（報）す^{これ}へし。是
願う所の幸にあらずや。譬、^{たとえ}方々^{かたがた}が夷^い（異）見【意見】に付、此城を出すし而、命を助た
り共、何の面目有て秀吉公之御見参に可^{いるべき}入^べか。此上は方々はへ次第、某におゐては只^い一人^{ただひとり}敵
陣に掛入、心能討死せんとして既に物^{のう}としくして太刀取^{たちとり}て出^{いで}んとし給^{たもう}ふ。
其時、両臣涙を^{おさ}押^{さてもさても}え、扱^{おうせ}も^{じいりそうろう}と大^が将の仰^がかんし入^で候。我々か智の浅きゆえ、それまでは
いよらず ごうんおひらきなられるそうろうこと ぞんじ のべき
思^いひ^よ寄^らず、只君の御運御開^{ぞんじ}被^{のべき}成^の候事^をの身【み】存^{ぞんじ}候、儀を見て陳^のさるは、勇^のな
きに似り。片時も急^がかせ給^{たまえ}へ、我々も御供仕、大^{おともし}将^し諸^べ共^ば討^{ならびい}死^ら仕^らす^らへしと申^ばけれ^らハ、座^ばに並^{ならびい}居^ら
たる良臣・其外、城中之侍儀の一理を^じかんし、皆一同に、我も^{うちたて}と打^し立^{からば}けり。然^しハ、軍^し神

之血祭に、脇山の城に残る星野を討て、夫から薩摩勢を追わむと翌朝未明に立花の城を打
ろし、脇山の城に取掛、一時に責落し、星野何某を討取。夫から海道に掛り、水城の戸
を打過、薩摩の勢を間近く追詰、遠矢射懸、鉄炮はなしかけ、跡をしとうて薩州の軍勢を
筑後川の辺にて取て返し、防ぎ戦う。扱又、秋月宗仙種真、薩摩と無二之一味也。一年嶋津
と言合有て、秋月より板並左京と言者、薩摩に遣し七代迄ハ、一味致へしと記證文
【起請文】取替（取交）し、ことなれば是も秀吉公に随ず、我等居城古所山は、
ならひなき名城なるに、此城に楯籠、八町坂を切ふさき、古所之要害に引請、一命を
捨て防ぎ戦う物ならば、中々上方の軍兵雲霞（の）如く寄来る共、左右なくやふられましき
物をと内儀評定究り、さあらば、先秀吉公へ使者を上せ、九州進発之儀を窺、其
次手に敵の有様を見すへしとて、秋月普【譜】代の侍に縛（？）利蔵之助という切者の侍
を忽らひ、中国辺迄指遣す。蔵之助、安芸之広嶋にて、秀吉公に行合、槇野弾正、是
を取次ぐ。御前へ伺公【候】仕、秀吉公御覧被成、あれは秋月が使の者かと、仰けれ
ば、内蔵之助謹而言上す。今度薩州御発向之儀に付御手にしよく（食）し奉
へき為、秋月種真【種實】、是迄使者指上候由、言上仕、秀吉公御聞召、秋月は嶋津
無二之一身（味）たるよし其聞有。急て嶋津合躰の儀ひかえへし。我等か味方に可参。
さあらハ、秋月には筑前・筑後の両国を宛行へし。汝急帰国し、此旨を秋月に可申と
の御諚也。其上に而、御腰物を被申遣る。内蔵之助、謹而頭をたいし申けるは、
只今之御上意、秋月為に別て難有奉存上候、御上意之趣、急帰て種真【種
實】に申聞すべく候由、弾正委細に申上、頓而御前を罷立、秋月にはせ下り、秀
吉公の仰之趣、委細に申たりけれハ、種真・種長被申けるハ、我嶋津と一身七代迄
のけいやくを今更返して、秀吉にいかて馬をつなくへき。汝ハ、秀吉に能たばかられけ

るよな、片腹いたき烟（事？）とそ、笑われける。蔵之助申けるハ、御上意にては候得共、

このたび 今度ひでよし公、西国御発向の御勢凡 窺 申に、中々 心 言葉 難 及、勢之程何

十万騎と言数をしらす、四国・中国の勢は残らすはせ付、先陣 仕 と相見え候、其 餘

九 羽 の勢みなかうさん（降参）之使者を上 せ、秀吉公にしよくし候由、其 聞へ隠れ

なく、今のことくハ、薩摩と御当家 計 を社敵たいとはへえさせ給ひ 候。

秀吉に日本の諸士の随い付 事、偏風の草木をなひかすかことし 憚 多く候得共、

石公が三略之書に敵つおくは（強ば）是をこうせよと候えは、薩 羽 と調合され、秀吉公に

御したかひ候か、さもあらずハ、嶋津殿と御合躰之儀を御返し有て、早々秀吉公に御馬をつ

なかせ 可 然と 存 候 由、 憚 なく申ければ種真・種長を 始、家老・物頭に 至 ま

で、同音に笑ひ、扱 へ 内蔵之助はおかしき事を申物かな、秀吉にたばかられ、能力をもふけ、

能にめつるか、又はおくびょうの眼にて、角は見るへし、けしからぬ敵のほう様（猿冠者）

かな、何条そのさるか仕や（猿冠者）かきのふ（昨日）けふ（今日）まで下志津（下賤）に

て、何程の事を仕出へし。 忝 も当家ハ漢のかうそ（高祖）より 伝 り、弓矢を取て代々

ほまれ之家なり、其上名を得たる 人 町 坂 を持なから、秀吉にかふさん（降参）し、薩摩の

人々に何之面目有て、おもてを向ふへし。只籠城にて有べしと、皆一同に申ければ、種真

【種實】父子、此儀に同し、籠城にて 定 りけり。内蔵之助面目失ひて見けるか、心うく（憂

く）や思ひけん。重 て 申 けるは、我等くあんの身にて、重て申けるは、恐 多く 乍 存、

かか かる大事の前ならば、申さぬも又ふ忠（不忠）なれば、重て申上候、只今の君の御 誼、

諸士之言葉は、当家の御運も末に成たると被 存 候え、今見 給 へ、芳 へ 【旁(かた) へ (がた)】

只今之討【内】には、似ましき物をと色を違へ 申 ければ、にくき者之 申 ようかな。か

ようのおく病もの我々が中にはおかまし軍神の血祭り 討 せ 給 へと申ければ、種真【種實】父

子同心して、頓而腹をそ切せける。無残なりし有様也。

種真【種實】も薩摩と一味の事いふ。殊には岩谷・宝満・勝尾・立花に 至 まで加勢にて本望を達したる事なれば、今更嶋津に 背 難く、角は、はからひ給ふらん。譬え其儀たり共、さしも忠義の内蔵之助あへなく志害（自害）せられしハ、種真【種實】父子の不覚なりと、世の人皆言あへり。秀吉公御かんゑつ（観閲）有て、あれを見よ、三河守と被 仰、居たけ高に被為成、是御覽しける所に小判少も 滞 なく塀の上に上り、頓而城内に入ぬ。敵も 叶 わしとや思ひけん、早々城を退出して、防 兵 壱 人もなし（と）思ふす【ま】に 乗すましける。其後、諸軍勢我もゝと 責入て、岩石の城も落城す。夫より筑前之国大隈に 掛 給ふ。彼城にと 申 八、秋月宗仙 隠 居城にて、形の如く要害なれば、爰にて上方諸勢をさゝえんと相 侍 所 に既に岩石の城落ちて上方勢氣に乗りてせめ来るよし聞えければ、取物も取りあえず、城をにけ【逃げ】、古所之城へ加へける。是に依て、何之 滞 もなく、秀吉公大隈之城に御入有て、則御陣所とそ被成ける。

秋月軍勢共、古所山の上から大隈の方を見渡せば、將軍之御勢、何十万騎といふ 計 な 陣所 なく嘉摩・穂浪【波】、両郡にみちゝて、寸尺之 間 もなく、とう待 杭 の如く也。陣所ゝ にかくかかりひ【かがり火】は、晴たる星の如し。野里川迄も皆軍勢とそ見えたりけり。夜明て、大隈の城を見れば、一夜の 中に見なれぬ白土の付、腰板を打、当り【辺り】もかゝやく 計 なり。是は秀吉公智法のゆゝ敷（ゆゆしき）名将にて、敵の気を取らん為之 御 計 事 也。

奉公を以て、かべを張せ、民家の戸板をあつめて、腰板に社被成ける。是見て、種真【種實】父子、其餘家頼【家来】の者共、皆あきれ果たる 計 也。其頃いなか口にて、是程まで武士之数は多きものやう【やら】、大形【大方】人間のわざとは見へず、鬼神のしよいそと老若男女言あへり。此時世の人 申 けるハ、扱も内蔵之助は巧者也、故 此 躰見濟して社い

さめられし物を、あらた侍を殺させらるゝ物かなと、口くちぐちにもうし申ければ、種真【種實】父子、
今ハ叶はかなわしとやおもひけん、甲いをむき、弓かぶとの弦づをはつし、かう人（降人）に也【成】、古所
の城を下り、法ほうたい躰えの身と也、家ばの名物いうちやいれならしはと言ささげ茶入かいだを捧、嘉摩郡芥田という所の
道ひろまさの辺へ広昌おれいもうしあげるにて、太閤江御礼おおせ申上。秀吉公仰けるは、秋月父子、是迄出仕之段大慶
也、今までは是非ぜ共に、かうべ（頭）ひともをは（勿）ぬべき社こそおもい思ひしに、角かう人（降人）に
出るゆえふ便【不便】加えへ、父子共に一命を助てとるぞ、急ぞ薩摩への先手いそぎさつま仕せんてつかまつれ、との御
おおせ 詫也。種真【種實】父子共、畏おそれて御先手おせんてつかまつ仕る。

さて 扱、秋月父子は、御先手へ押被出、大【太】閤ハ、秋月の丑寅うしとらに当あたりて、荒手と言所の
山御陣之（？）被成、兩日御滞留有而、所の御仕置被成、明なされる早天あくに肥後国へと人数を

おさせたまう。鍋島加賀守を始、其餘国そのよこく之ことごと武士、悉ぞいそぎく御手にしよく【食】し、薩摩へそ急
ける。西国武士之出立過半、見苦敷中にも、旗指物を受筒にて指事をしらす、繩にてせ

（背）にしはり付、或あるいはかた肩ばに打かたけ杯して、おかしき事づ己【のみ】多かりけり。上方の
軍勢皆是を笑ふ。時に鍋島加賀守、秀吉公之御前に追付奉り、謹おいつきたてまつ而つつしんでもうし申けるは、ち

んせい（鎮西）の將軍勢、都の軍見ぬ物は殊外、出立見苦き不都合成事多し、是依て、
上方の武士笑い、或あるいはゆび指候へは、田舎物の儀さしそうらえに候得は、はつかしき事そうろうえに思ひ、武

者杯も果敢行不申候と恐入たる言上ごんじょうに御座候得共、御下智【下知】被為成可被
成下由申上ければ、太閤聞召れ、夷ききめさは、嘸えびすあらん、国々所々の習有さぞと言事を知らず、

此これい已後是を笑ふ輩これは罪科をうやからに行とがへし、との御詫おこなうべなり。其後は笑ふ物【者】もなかり
けり 頓而、秀吉公先陣を薩摩江被押入れれば、薩州勢おんおおせ茂日向国室津辺出向合戦

あり 有。中にも黒田長政公同国高尾原たかきはると言處いうところにての高名いひるひなき（比類なき）御事也。東
【藤】堂和泉守殿、耳川乃先陣又寺山之目いづみのかみす言所のもくにて宮部善城坊の陣へ薩摩から夜討之

とき なだかきほまれ はくあわて
時、善城坊の高名何も名高き 誉也。かかる所に、嶋津隆【龍】伯頓てはり付木（磔木）を
こしら これい ごうま ぎ あおぎたてまつる
拵え、先に持せ、大【太】閤御前かうさん(降参)して、此已後馬をつなぎ、主君と 仰 奉
べ もしまた ぶかくごしゃめんならずそうらわば すなわち おんかかけなるべし
へし、若又御いき通り(憤り)深ク御赦免不被成 候はゞ、則 はり付木に御掛可被 成
つつしんでごんじょう いこん
と 謹 而 言 上 す、秀吉公御かん有て、今より互に遺恨なく嶋津一家共、今から持来之領地
そういなくあておこなう の おんおおせ ことごと おんて いり
永代無相違宛 行 べきと之 御 詫也。薩州 悉 く御手に入、日向から大和中納言殿御味
さんじされ ただし はじめ はちすかあ わのかみ
方に被 参、但シ、黒田孝隆【高】公を 始、尾藤甚右衛門、蜂須賀阿波 守 殿、其諸国大
さっしゅう むかわ のうえは おさま
名小名数万騎、薩 弼 へ 向 れ、薩摩降参之上ハ、西国太平に 治 りけるとかや。
やがて かしこもうされ は て はいじゅ
頓而立花左近将監、秀吉公之御前に 畏 被 申 けるハ、私之儀、是に而御暇 拜 受
おおせつけくたされそうらえ いまださっしゅうとりごめ やありしそうろうのじょう
被 仰 付 被 下 候 へかし、其意趣は、愚母亦宗増を 未 薩 州 取 籠 と也 有 之 候 条、
かのち きわめもうすほどよし ごんじょうにおよぶ おききになられ もつともせんぼんのしだい
彼地へ立越、有無を 極 申 度 由、 及 言 上。秀吉公御聞被 成、 尤 千 萬 之 次 第、
あわせて しめされた きおもむきに しばらく
併 諸 士 の 内 から 被 指 越 度 趣 二 て、 暫 御 思 案 有 て、 誠 に 蔣 (マ マ) 野 三 河 守 は、 智
まさり ききおよぶ いそぎ めされおんじきじき おおせいづる は
略 万 騎 に 勝、 大 剛 之 者 と 聞 及 な れ ば、 急 召 せ と て 御 座 近 く 被 召 御 直 に 被 仰 出 ル ハ
まわし ゆえ
其 方 是 から 薩 摩 へ 行 向、 随 分 法 寸 の 廻 シ、 左 近 母 弟 宗 増 を 無 事 故 取 返 し 得 させよ、 と 厚 く
おんたのみのぎよい うけ いぎおよばず ただち しまづなかつかさ まねき
御 頼 之 御 意 を 受、 不 及 異 議、 直 に 薩 マ (薩 摩) へ 立 越、 嶋 津 中 務 を 招、 何 と か 語
もうしとお どす それ
ら (れ) けん、 即 時 に 隆 伯 一 家 へ 申 通 し、 翌 日 武 人 の 御 方 を 結 構 して、 三 河 守 に 相 渡 ス。 夫
ときひうつさず はせのぼり おおさかにて きみへ つぶさにごんじょうす
から 不 移 時 日、 馳 登、 大 坂 二 而 秀 吉 公 江 奉 行 合、 委 二 言 上 ス。 秀 吉 公 御 感 有、
はなはだしく くすのき まさ おほめなされ おてづ
甚 敷 三 河 守 は 高 名、 楠 にも 増 り たる 武 士 也 と 御 誉 被 成、 御 手 つ っ かり 大 原 実 盛 の 御
くたされ おいとまもうしうけしもくにつかまり
刀 を 被 下、 御 暇 申 受 下 国 仕 し 由。

其後、秀吉公京都江御帰城被成、御詮議有て、今度西国の合戦ニ忠功有、諸士多き中に
きゅうしゅうのほまれもの なり おめぼしされた おかんじょう
も、立花左近将監九 弼 之 誉 物【者】也と被 思 召 とて、御 勘 定 即 左 近 将 監 に 筑 後
おおせつけられ いうところ
之内、柳川にて拾二万石余領地 拜 受 被 仰 付、舍弟宗増へ同国三池と 言 所 壺 万 石 余、是を

くだされた 被 下。其外黒田如水公、石田治部少輔から添状之趣ヲ拾書、そえじょうのおもむきを 誠まことに 希代の御感状也と

かや。其時代之諸侍浦山去【羨まざる】ハ、なかりけり。もろさむらいうらやまざる うらやまざる は

四王寺山中腹の岩屋城跡



岩屋城二の丸跡にある紹運の墓



嗚呼壯烈岩屋城

いわやじょう

故吟道清泉流清泉会宗家末増清泉作

戦雲吹き捲いて 四王に横たわる

大挙 攻めきたる 島薩の兵 とうさつ へい

時日 十余 天正の夏 じじつ

直ちに 之を迎ゆ 七百余名 これ むか

雙方 弾丸を放つて 雨の如し そうほう

谷吼え 山は鳴つて 地上轟く たにほ

刀 摧れ 矢尽きて 全員斃る かたなお たお

嗚呼 壯烈 岩屋城

嗚呼 壯烈 岩屋城

